



岡山県倉敷市

高梁川は流域に恵みをもたらす母なる川ですが、一旦暴れだすと大きな被害を与えました。上流域の鉄穴流しなどにより大きな水害を起こし続けてきた高梁川でしたが、明治26（1893）年の大洪水では死者292人、流失家屋5000戸以上という大惨事をもたらしました。

これを機に明治40年、内務省による工事が始まり、大正14（1925）年によく当初の改修が終わりました。約20年間に及ぶ事業は、清音村古地の沖で南と西に分岐していた流れのうち南向きの東高梁川を廃止し、西高梁川の西側を閉め切ったうえで、八幡山の東から南にかけて新たな流路を建設するものでした。廃川となった東高梁川は、後に農地や工業用地となり、地域の発展に寄与しています。この大改修によって、酒津の景色も様変わりしました。

高梁川の両岸にあった11カ所の農業用取水口は一つにまとめられることになり、合同堰が造られました。これが笠井堰です。また、高梁川東西用水組合の結成で、取水された農業用水を従来の取水量や灌漑面積を考慮して21の樋門に配水するという経済的、かつ公平に配分する仕組みが決められました。この事業の完成で洪水被害や水争いもなくなり、現在も安定した農業用水が供給されています。

東西用水酒

津樋門は、取水樋門を通過して一旦配水池に流れ込んだ水を、八ヶ郷・山根川・中川・三番川・浜川の各用水路に配給する北配

■位置図



水樋門と、倉敷・備前樋・南部・西部・西岸の各用水路に配給する南配水樋門で構成されています。樋門の高さを揃え、幅（樋門の数）を変えることで水量を配分するようになっています。

樋門の構造は鉄筋コンクリート水門でありながら花崗岩をあしらった端麗な構造で、特に南配水樋門は15のゲートをもち、現存する水門としては国内最大級のものです。平成10年に老朽化した施設の整備と併せて、配水池周辺の環境整備が行われ、市民の憩いの場となりました。高梁川改修から1世紀、関係者の努力が景観を生み出しています。



高梁川の改修時にもうけられた笠井堰。



笠井堰から取水する水門
ここから、高梁川の水が配水池へと送り込まれる。



酒津配水池
高梁川から取水した水を農水として倉敷市と早島町に配水するため、一時的に水を貯めるところ。



現存するものとしては国内最大級の15連の南配水樋門
樋門後方が配水池。船穂や玉島にいく西岸用水、西阿知や水島にいく南部用水、それと倉敷用水など、5つの水路へ配水を調整する大規模な樋門。